

環境意識と「距離的要素」・「時間的要素」の関連性

大瀬 浩子

本論文は、上智短期大学の学生へのアンケート結果をもとに、主に環境問題への危機感について考察することにより、環境配慮行動をうながすための、有効な方向性を明らかにする。

環境問題が、新聞やテレビをはじめとする、さまざまな媒体で扱われることにより、また、環境教育の普及などにより、環境問題への一人一人の意識は高まっている。しかし、高まっている環境意識が、実際の環境配慮行動につながらない現状にある。

このような傾向をふまえて、上智短期大学の学生へのアンケート結果の分析から、高まっている環境意識を環境行動へとつなげるため、環境意識を危機感の点から、主に「距離的要素」と「時間的要素」を中心として考察した。

～はじめに～

「沈黙の春」や「成長の限界」が発表された1960～1970年代から、環境問題は地球規模の問題であることが認識されはじめ、国際会議において主要な議題として扱われるようになった。

その後、リオ・サミット、ヨハネスブルグ・サミットなどの国際会議において議論が重ねられ、環境問題に対する個人の意識も次第に高まってきた。しかし、高まっている環境問題への意識に対して、環境配慮行動がともなっていないことが、様々な調査において問題点として指摘されている。

本論文では、上智短大生へのアンケート調査をもとに、環境問題への危機意識と、時間的要素と距離的要素との関係性を明らかにする。たとえば、現在の近所のゴミ問題と、100年後のアフリカの森林問題を、同レベルの意識のもとに危機感を感じることができるであろうか。危機感に差があるなら、環境行動に影響を及ぼす可能性が考えられる。

時間的要素と距離的要素が、環境意識に及ぼす影響を調査し、環境意識と環境行動が乖離する原因の一端を明らかにする。

1. 環境配慮行動の規定因モデル

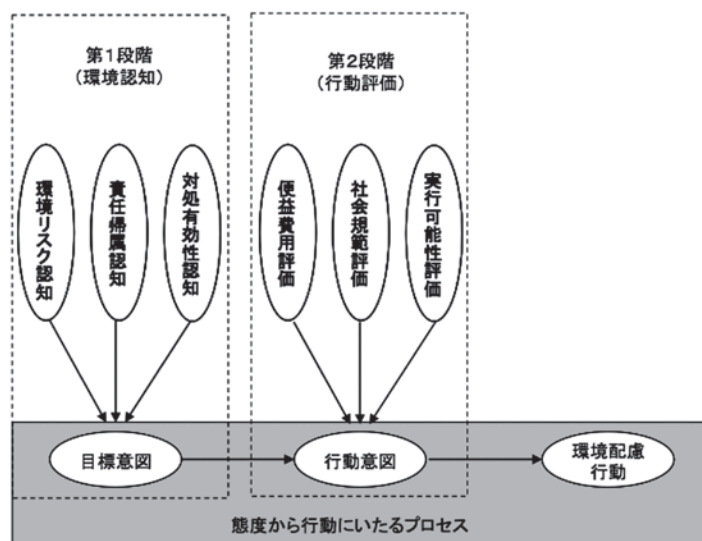
環境意識と環境行動の関連性に関する研究として、広瀬氏の「環境配慮行動の規定因モデル」¹があり、このモデルは、さまざまな研究によりにその妥当性が確認されている。

広瀬氏のモデル〈図表 1〉によれば、第一段階として、環境行動にいたるまでに、環境にやさしい目標意図²が形成され、第二段階として環境配慮の行動意図³が形成される。

第一段階の目標意図（態度）は、環境認知として、環境リスク認知（危機感）、責任帰属認知（責任感）、対処有効性認知（有効感）の三つがある。また、第二段階の行動意図（行動）は、行動評価として、社会規範評価（規範感）、費用便益性評価（負担感）、実行可能性評価（実行可能感）の三つがある⁴。目的意図が形成され、行動意図が形成されるという二段階の構造により、個人は環境配慮行動をとるようになる。

本論文では、広瀬氏の「環境配慮行動の規定因モデル」における、環境認知の中の環境リスク認知（危機感）について、アンケート調査とその後のヒアリング調査をもとに、考察を行う。

〈図表 1〉



出典：広瀬幸雄編「環境配慮行動の社会心理学」北大路書房 2008 年刊

1. 広瀬幸雄（1994）「環境配慮的行動の規定因について」社会心理学研究第 10 卷第 1 号 44-55 頁
2. 環境問題にたいして、何らかの貢献をしたいという態度。
3. 環境保全のための行動の、具体的な実行意図。
4. 広瀬幸雄（2008）「環境行動の社会心理学」北大路書房 44 頁

2. 環境意識と危機感に関する調査 —目的・概要・方法—

・調査の目的と概要

アンケート調査では、広瀬モデルの環境行動の規定因モデルにおける「環境リスク認知」つまり環境問題への危機感を、環境問題への意識と時間的要素、環境問題への意識と距離的要素の二つの関係性について明らかにすることを試みた。

設問は1～15までである⁵。設問1～10は、Aが日本の環境問題、Bは海外の環境問題であり、A、Bどちらにより危機感を感じるか選択する。また、設問11～15は、A、Bともに日本の環境問題であり、同じくA、Bどちらかを選択する。

AとBどちらかを選択することにより、環境問題における危機感において、距離的要素、時間的要素は関連性があるのか、アンケート後に行ったヒアリング調査も含めて考察する。

・調査対象者と人数

上智短期大学の1年生と2年生、合計146名

・実施時期

2011年7月4日～7月14日

・実施方法

アンケート調査用紙を配布し、その場で回収。

3. 環境意識と危機感に関する調査 —距離的要素—

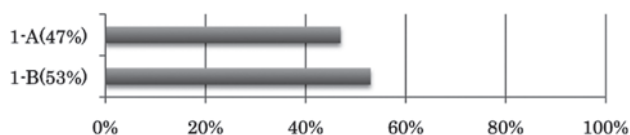
10問中、日本の環境問題の方に危機感を感じる方が選ばれたのは、設問2、4、5、7、8、9、10の7つであり、海外の環境問題の方に危機感を感じる方が選ばれたのは、設問1、3、6の3つである。

海外の環境問題の方に危機感を感じる方が選ばれた3つの設問の、A日本に関すること、B海外に関することの差は、大きくないといえる。それぞれ1－A 47% 1－B 53%、3－A 42% 3－B 58%、6－A 49% 6－B 51%であり、B海外に関することが多数になったとはいえ、その差は比較的小さい。

1) A 現在、日本の絶滅危惧種は、動物と植物合わせて3155種である。

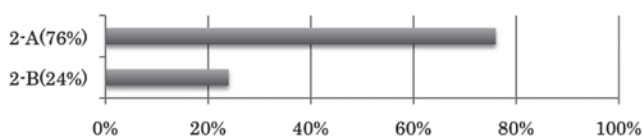
B 数10年後、北京（中国）は、人為的な開墾や気候温暖化により砂漠となるかもしれない。

5. 設問は、2011年8月時点において、新聞または研究機関から発表されているものである。



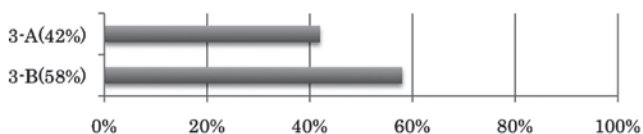
2) A 日本全国のゴミの最終処分場は、平均 10 年程度でいっぱいになるとの予測がなされている。

B 100 年後、気候温暖化により、北極の氷がすべて溶けるかもしれない。



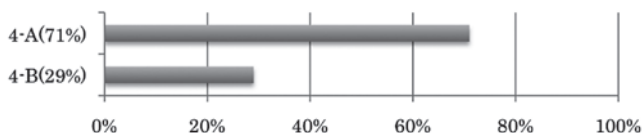
3) A 日本において、100 年後には、温暖化により東日本以西の大太平洋側で桜（ソメイヨシノ）が開花しなくなるかもしれない。

B インドネシアの森林は、違法な伐採などにより、あと数年で消滅するかもしれない。



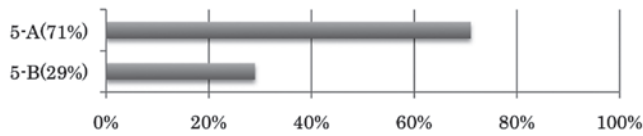
4) A 現在、北関東を中心とする日本各地の土壌は、放射能により汚染されている。

B 100 年後、アマゾンの熱帯雨林は、放牧地や農地確保のための山焼きなどが原因で消滅し、すべて砂漠になる可能性がある。

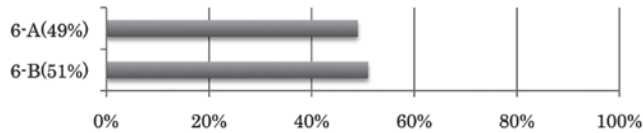


5) A 日本では、30 年後位に、酸性雨が原因で川から魚がいなくなるかもしれない。

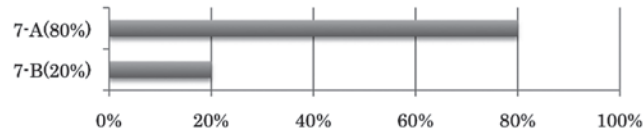
B 現在、イギリスのウェールズ北部では、チェルノブイリ事故による放射能汚染で土壌が汚染され、放牧する家畜を出荷できない。



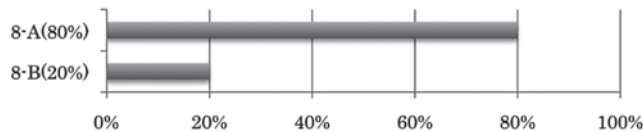
- 6) A 日本の都市部は、100年後には、ヒートアイランド現象により、40℃を越す日が少なくなるかもしれない。
- B スバル（南太平洋の島）は、50年後には、地球温暖化により海面が上昇し、海中に埋没する可能性がある。



- 7) A 現在、琵琶湖（滋賀県）は、埋め立、工場建設、家庭からの合成などが原因で、汚染されている。
- B 現座、中国に生息するジャイアントパンダは、乱獲と自然破壊により、個体数は1000頭ほどで、絶滅危惧種である。

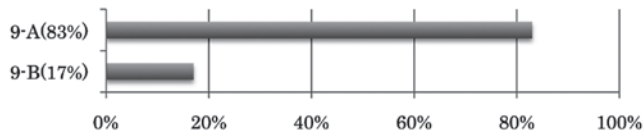


- 8) A 100年後の日本海は、冬の海水温の上昇が原因で無酸素化が進み、死の海になる可能性がある。
- B 現在、アフリカのビクトリア湖では、周辺地域の人口増加や土壌侵食などが原因で、水位の低下が著しく、水力発電に不都合が生じ、停電が多発している。



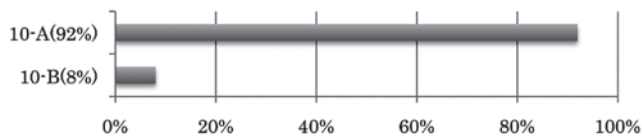
- 9) A 20～30年後、温暖化などにより、世界的に干ばつや地下水が減少し、日本においても、穀物や肉類が高騰するかもしれない。
- B アメリカ南部は、100年後くらいに、大気中の二酸化炭素濃度が倍増し気温上昇

することにより、熱帯病のデング熱発生地帯に入る可能性がある。

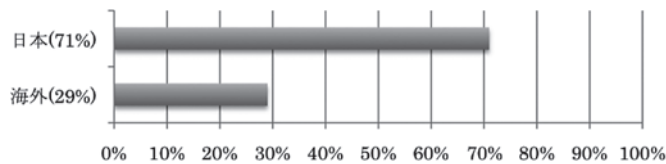


10) A 現在、日本に生息するイリオモテヤマネコは絶滅危惧種である。

B 現在、イベリア半島に生息するイベリアオオヤマネコは絶滅危惧種である。



・以下は、設問 1～10 までを合計した、日本と海外それぞれの選択率である。



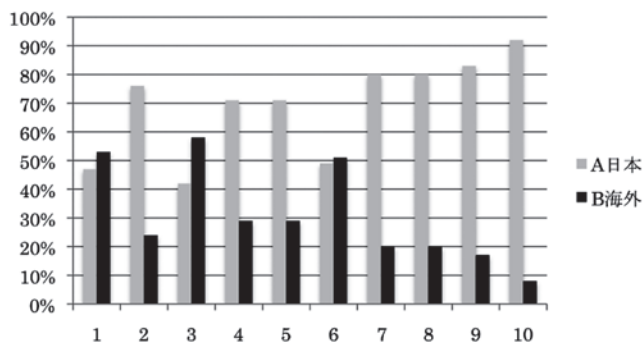
〈図表 2〉、〈図表 3〉は調査結果を集計したものである。日本の方が選択された中で、A と B の差が一番大きかったものは、設問 10 である。この設問は、A と B それぞれが、現在の生物多様性に関するものであり、日本とイベリア半島という場所の相違以外に差はない。この設問は、A が 92%、B が 8% であり、海外より日本の環境問題により危機意識を感じる傾向が高いことが、端的に表されている設問である。

また、1～10 問までの設問全体でみると、日本の環境問題が選択されたのは 71% であり、海外の環境問題が選択されたのは 29% であった。以上のようなことから、海外の環境問題より、日本の環境問題の方に、より危機感を感じる傾向にあるといえるのではないだろうか。つまり、個人の環境意識のなかの危機感において、環境破壊がおきている現場との距離が近いのか遠いのかという要素が、関係している可能性があり、その差は小さいものではないといえる。

〈図表 2〉

	距離的要素	%(小数点第1四捨五入)
1)-A	日本	47% (69/146)
1)-B	海外(中国)	53% (77/146)
2)-A	日本	76% (112/146)
2)-B	海外(北極)	24% (34/146)
3)-A	日本	42% (61/146)
3)-B	海外(インドネシア)	58% (85/146)
4)-A	日本	71% (104/146)
4)-B	海外(アマゾン)	29% (42/146)
5)-A	日本	71% (104/146)
5)-B	海外(イギリス)	29% (42/146)
6)-A	日本	49% (72/146)
6)-B	海外(ツバル)	51% (74/146)
7)-A	日本	80% (117/146)
7)-B	海外(中国)	20% (29/146)
8)-A	日本	80% (117/146)
8)-B	海外(アフリカ)	20% (29/146)
9)-A	日本	83% (121/146)
9)-B	海外(アメリカ)	17% (25/146)
10)-A	日本	92% (135/146)
10)-B	海外(イベリア半島)	8% (11/146)

〈図表 3〉



4. 環境意識と危機感に関する調査—時間的要素—

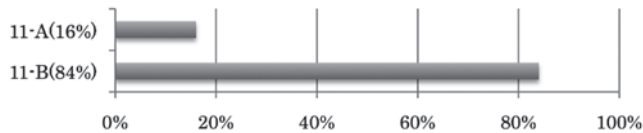
設問 11 から設問 15 までは、すべて日本国内の環境問題であり、設問 1 から設問 10 までと同じく、時間、分野がそれぞれ異なった二つ (A または B) からの選択方式である。

設問 12 と設問 13 の二つは、時間的に近い環境問題が選択されているが、設問 11、設問 14、設問 15 の三つは、時間的に遠い環境問題が選択されている。

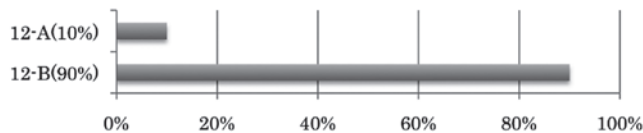
以上のようなことから、時間的要素は、環境意識の危機意識において、影響が大きいとはいえない傾向にある。時間的要素が危機意識に関係するとしても、環境問題がどのような種

類のものかということが、時間的要素より優先して危機意識を決定する要因ともなりうるといえる。

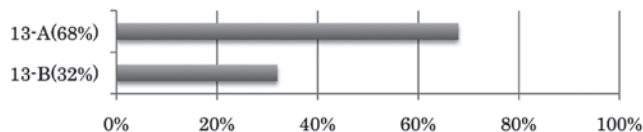
- 11) A 現在、日本の絶滅危惧種は動物と植物合わせて 3155 種である。
B 日本全国のゴミの最終処分場は、平均 10 年程度でいっぱいになるとの予測がなされている。



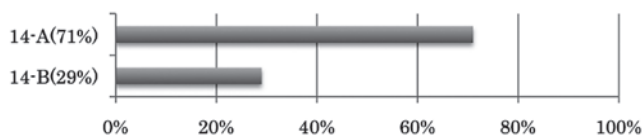
- 12) A 日本において、100 年後には、温暖化により東日本以西の太平洋側で桜（ソメイヨシノ）が開花しなくなるかもしれない。
B 現在、北関東を中心とする日本各地の土壌は、放射能により汚染されている。



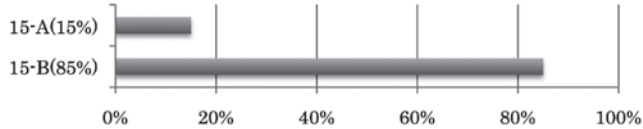
- 13) A 日本では、30 年後位に、酸性雨が原因で、川から魚がいなくなるかもしれない。
B 日本の都市部は、100 年後には、ヒートアイランド現象により、40℃を越す日が少くない。



- 14) A 現在、琵琶湖（滋賀県）は、埋め立、工場建設、家庭からの合成洗剤などが原因で、汚染されている。
B 100 年後の日本海は、冬の海水温の上昇が原因で無酸素化が進み、死の海になる。



- 15) A 20～30年後、温暖化などにより、世界的に干ばつや地下水が少し、日本においても、穀物や肉類が高騰するかもしれない。
 B 現在、日本に生息するイリオモテヤマネコは、絶滅危惧種である。



〈図表4〉、〈図表5〉は、設問11～15の集計結果である。日本の環境問題を、時間的要素中心としてみたときに、以下の(図7)は、「現在」と、「数十年後」までと、「100年後」までを三つに分類したときの、それぞれの平均ポイントである。

「現在」は平均70⁶/146ポイント、「数十年後」までが平均118⁷/146ポイント、「100年後」が平均35⁸/146ポイントである。

ポイントの多さは、「数十年後まで」、「現在」、「100年後」の順であり、「100年後」のポイントは、「現在」の50%、「数十年後まで」の34%である。

設問11から15は、「時間的要素」と「環境問題の分野」という二つの要素が含まれている設問であるため、「時間的要素」と環境意識の関連のみを厳密に判断できるとは言いがたい。しかし、設問15以外の設問は、すべて時間的に遠い将来の環境問題が選択されている点。また、「100年後」の環境問題へのポイントの低さを考慮した場合、環境問題への意識が「距離的要素」と関連性を持つ可能性は否定できない。

〈図表4〉

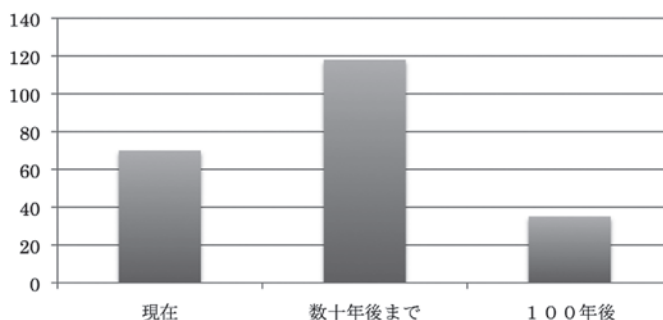
	時間的要素	%(小数点第1位四捨五入)
11)-A	現在	16% (24/146)
11)-B	10年後	84% (122/146)
12)-A	100年後	10% (15/146)
12)-B	現在	90% (131/146)
13)-A	30年後	68% (99/146)
13)-B	100年後	32% (47/146)
14)-A	現在	39% (57/146)
14)-B	100年後	61% (89/146)
15)-A	数十年後	85% (124/146)
15)-B	現在	15% (22/146)

6. 小数点第一位四捨五入

7. 同上

8. 同上

〈図表 5〉



以上のアンケート調査の結果を踏まえて、ヒアリング調査を行い、環境意識と「距離的要素」、「時間的要素」の関連性をさらに明確にする。

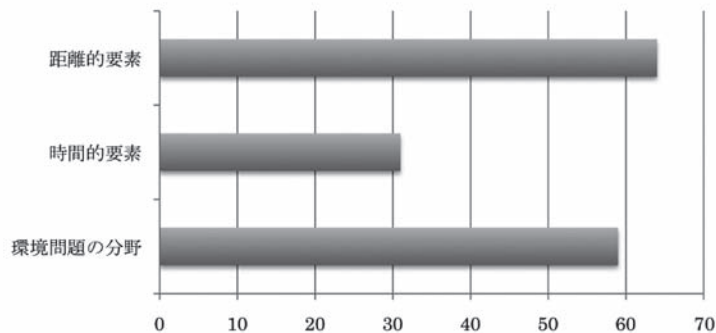
5. 環境意識と危機感に関する調査—ヒアリング調査からの考察(1)—

環境問題への危機感について、「距離的要素」、「時間的要素」がどのように影響があるのか、さらに深く探るため、15の設問からのアンケートを行った後、アンケートに答えた学生41人へヒアリング調査を行った。アンケート項目は、「距離的要素」、「時間的要素」、「環境問題の分野」の三つの要素から成り立っているため、「環境問題の分野」についても調査の対象とした。

ヒアリング項目は、二つであり、一つ目は、アンケートに答えた時、「距離的要素」、「時間的要素」、「環境問題の分野（どのような環境問題であるか）」の中でどの要素を、気にして、重要視して回答したかについてヒアリングした。「とても気になる」を2ポイント、「気になる」を1ポイント、「気にならない」を0ポイントとし、集計した〈図表6〉。

調査結果は「距離的要素」が64ポイント、「時間的要素」が31ポイント、「環境問題の分野」が59ポイントであった。「距離的要素」は「時間的要素」より環境問題の危機感において、より強く意識される傾向にある。

〈図表 6〉



6. 環境意識と危機感に関する調査 —ヒアリング調査からの考察 (2) —

二つ目のヒアリング調査として、「距離的要素」、「時間的要素」、「環境問題の分野（どのような種類の環境問題であるか）」の三要素について、「とても気になった」、「気になった」、「気にならなかった」を選択した理由を聞いた。

「距離的要素」が「とても気になる」または「気になる」とした回答の理由は、以下のものがあつた。

- ・世界より日本の方が身近なこととして、危機感をより強く感じるから。
- ・日本の環境問題の方が世界の環境問題より情報が多く、詳しく知っていることがあるので、より現実感をもって危機感を感じるから
- ・日本の環境問題は、自分だけでなく家族や友達にも影響を与える可能性が高いため、影響が大きく感じられ、離れた場所の環境問題より、危機感を感じたため。
- ・日本人として、日本の環境問題により責任を感じるの。

「距離的要素」が気にならなかったという人の理由は、以下の理由があつた。

- ・遠い国で起こっている環境破壊も、世界は繋がっているので、やがて日本に影響が及ぶことが懸念されるから。
- ・旅行や留学で行ったことのある外国については、知人などもおり、日本と同じように身近に感じられるので。
- ・外国の環境問題であっても、学校の授業やメディアなどから詳細な知識を得ている国については、離れた国の環境破壊であっても、身近に感じる事ができたので、日本と異なったレベルで意識することが無かつたので。
- ・距離的要素より、時間的要素、環境問題の分野の方が気になつたため。

「時間的要素」が「とても気になる」、または「気になる」という回答理由は、以下の回答があつた。

- ・現在のこのことの方が 100 年後のことより、対策を急がないと危険があると思つたので。

- ・100年後、自分は世の中にいので、あまり実感がわかなく、現在起きているまたは、近い将来予測されている環境破壊の方に危機感を感じるため。
- ・100年後には新しい技術が開発される可能性があり、現在にはない解決方法が期待できるので、今現在または近い将来の環境問題の方により危機感を感じるから。
「時間的要素」が「気にならない」人の理由は、以下の回答があった。
- ・100年後に予測される環境破壊であっても、状況の変化により、100年後より近い将来に起こる可能性があるため、現在の予測が正確なものであるとは限らないため。
- ・100年後のことも、将来、自分の子供や孫に関係があることなので、それほど遠い未来には感じられなく、現在でも100年後でも同じように危機感を感じるため。
- ・時間的要素よりも、距離的要素や環境問題の分野の方が気になったので。
「環境問題の分野」が「とても気になる」または「気になる」という回答理由は、以下のものがあつた。
- ・環境問題の分野によっては、現在の技術によって解決の可能性があるものと、解決が現在は難しいものがあるので、どのような種類の環境問題かが重要であると思ったから。
- ・どのような環境問題であるかというのが、具体的事例であるので、より危機感を感じやすかつたから。
「環境問題の分野」が気にならないという人の理由は、以下の回答があつた。
- ・環境問題自体にそれほど知識が多くないので、どのような環境破壊でもあまり区別して考えられないので。
- ・環境問題の分野よりも、距離的要素や時間的要素の方が気になったため。
アンケート調査後のヒアリング調査により、「距離的要素」の方が「時間的要素」と比較してより危機感を感じる要素となる傾向にあるが、「時間的要素」も危機感を感じる要素であることが、より明確になった。

7. むすび —環境意識と距離的要素・時間的要素の関連性—

本論文は、上智短期大学の学生へのアンケート調査とその後のヒアリング調査をもとに、広瀬氏の「環境配慮行動の規定因モデル」の「環境リスク認知（危機感）」を、環境意識と距離・時間との関連性について調査することにより、さらに明確に捉えることを試みた。

「距離的要素」と「時間的要素」は、アンケート調査、ヒアリング調査により、環境問題への危機感と関連性について明らかになった。また、「時間的要素」より「距離的要素」の方が、重要視される傾向にあることが明らかになった。

環境問題への意識において危機感の差は存在し環境行動へ少なからず影響されると予想される。本研究で明らかになった点から、危機感の差が環境行動へ、どのような形で影響が及ぶのかについての詳細な傾向について、さらには、危機意識の差を減少へ導く方策について、研究を進めてゆきたい。